

我が国におけるスポーツナショナリズムの歴史的研究

A historical study of sport nationalism in Japan

1K07B516-5 坂本 龍太

指導教員 主査 作野誠一先生 副査 リー・トンプソン先生

【研究目的】

近年、日本人が「自分たちが日本人であること」の証明を探し回っているように思える。経済がグローバル化し、内需のみに頼ることができなくなり、国外を改めて強く意識せざるを得なくなったことも一因だ。日本はナショナリズムに希薄な国家だといわれるが、本当にそうだろうか、常に疑問を持ってきた。戦前のナショナリズムにはすさまじいものがあった。戦中はスポーツがナショナリズム昂揚の目的のために最大限利用されてしまった。逆に戦後は、ナショナリズムが完全否定されるような風潮が出来上がった。

スポーツナショナリズムというものは概念が非常に抽象的であり、善悪の判断も時代精神に大きく左右される。戦後日本においては、ナショナリズムは完全に悪とみなされてきた。だが、筆者はたびたびスポーツナショナリズムには、国際的なスポーツの試合を盛り上げる舞台装置のような役割も果たしていて、必ずしも悪とは言えないのではないかと考えてきた。つまり、日本において問題視されているスポーツナショナリズムは実は「軍国主義に利用されたスポーツナショナリズム」のことであり、スポーツナショナリズムそれ自体は何ら価値を持たないのではないか。

そもそもナショナリズムという概念が非常に曖昧であり、筆者は常にナショナリズムという言葉の概念を正確に理解したいと思っていた。

以上より本研究では、我が国におけるスポーツナショナリズムの歴史的背景を明らかにしていくことを目的とする。

【研究結果】

本研究によってナショナリズムという言葉が①国民②民族③国家の3つの意味を持つことから、スポーツナショナリズムという言葉も3つの意味を持ち、国民、民族、国家のどれに力点を置くかによってスポーツナショナリズムという言葉の意味も微妙に変化すると言うことが分かった。また、スポーツナショナリズムと

は、ブルジョワナショナリズムと一体化しているものであり、多数の非ブルジョワである国民がこれらへの同化を要求され、また自ら同化していった歴史を整理することができた。

日中戦争から大東亜戦争に至る戦時体制の拡大化の過程においてスポーツを歪曲化して、忠君愛国の国家意識宣揚の場として、スポーツに関する国民の意識の高まりを政治的に利用しつつ、スポーツを積極的に奨励したこと、戦後体育に科学が持ちこまれた歴史などが分かった。スポーツナショナリズムが左・右どちらにも傾いた経験を持つ日本には、どちらにも傾くことのない新しいスポーツナショナリズムを模索していく必要がある。

【考察】

これからのスポーツナショナリズムのあり方に関していえることは、戦前の国民なきスポーツナショナリズムと戦後のナショナリズム完全否定を、繰り返すことなく、新しい形のスポーツナショナリズムを模索していくべきであるということである。自国を誇ることと、ナショナリズムがミリタリズム化していくことは無関係である。そのことを、国民が理解し区別できれば、国家である君が代を、サッカー日本代表全員が三浦知良のように堂々歌い上げている姿が見られるかもしれない。

筆者は君が代＝右翼という図式がなぜ成り立ってしまうのか理解できない。世界中で自国の国歌を堂々と歌うことができないのは日本ぐらいであろう。国歌を歌うことがタブーとされる風潮ができてしまったのは、既述の戦前におけるスポーツのミリタリズム化と混同されているからではないだろうか。

日本はナショナリズムの過剰昂揚と過剰衰退のどちらも経験済みであるという事実は代えがたい財産である。この経験を生かし、スポーツナショナリズムが左右どちらにも偏らせることなく、自国を誇り他国に敬意を払える国家となれるように、国民一人一人が努めていくことが肝要だ。